

森の紙芝居部門 小学生の部 最優秀賞（林野庁長官賞）

「きりがみの森」 作：和田 幸（ユニコーン）



きりがみの森



ある日、ある時、ある所のお話。
きりがみが大好きな、歩実という女の子がいました。
ある晴れた午後、歩実はにわで、きりがみをすることに決めました。
「お母さん、歩実、おにわできりがみしてくるね。」



歩実がはさみと紙をもって、にわにこしをおろした時です。ふいに森のおくから、青い小とりがとんできて、はさみと紙をもって、森の奥にとんでいってしまいました。
「まって！」
歩実が言っても、小とりは森のおくに消えてしまいました。
「早く、とりかえさなくちゃ。」



太い木の間をくりぬけて、細い枝を通りぬけ、さいごにサルスベリの花をかきわけると、そこには、花がいっぱいさいていて、まるでちいさなあきちのようでした。



「あぁ、こんなところにあつた！」
そこでは、はっぱを何まいもつなげて作った、大きな紙をとりかこんで、青い小とりと大ぜいのどうぶつたちが、わらったり、お話を聞いたり、木の実を食べたり、きりがみをしたりして、あそんでいたのです。
「歩実もいれて。」
歩実が言うと、青い小とりがピロロロとなき、みんなで歩実のせきを作ってくれました。
「ありがとう。」
歩実は、紙をひざにおきながら言いました。



「はさみは一つしかないからじゅんばんね。」
きつねが言いました。ようやく歩実にはさみがまわってきて、歩実はうさぎをきりました。
「一緒にあそぼう。」
うさぎが本ものだと思いこんで、話しかけました。



「あれ？」
おどろいたことに、さっき切り抜いた後が、元どおりになっています。
ここは、まほうの森で、穴をほっても、一しゅんで消えてしまうのです。
歩実 は、切ったものをはっぱの紙にのりではりました。



「あれ、なんで紙がうごくの？」
なんと、きりがみのうさぎが、きりがみのブランコで、あそびはじめたのです。
ほかのどうぶつたちも、自分を切り抜いたり、木や花を切ったりしていました。
はっぱの紙が、もういっぱいになったころ、切ったものみんなが、あちらこちらに歩いていきました。



子リスが、歩実がおどろいているのに気がつきました。
「今にわかるよ。よく見てごらん。」
きりがみたちは、いろいろなところにまるで氷になったようにかたまりました。
すると、本ものの木や、花や、草になったのです。



くまが、やさしく言いました。
「ほんとうは、キミの家から、何でも紙とはさみをかりていたんだ。ぼくらのしごとは、森づくり。何回も何回もきりがみをして、森を大きくするんだ。」
キミの紙をつかったってことは、キミは、森をふやしてくれたってことなんだ。
ありがとう、森をまもってくれて。」



歩実の目から、涙があふれてきました。
こんなにうれしかったのははじめてです。
「さあ、もう帰った方がいいよ。」
日がくれかけて、もう夕方になろうとしていました。
歩実 は、夕やけの中を走って家に帰りました。
そして、今あったことを、お母さんにのこらず話しました。